

地域小集団による建築生産の研究

乾 尚彦

—蘭嶼の居住空間—

序章

I. 研究の概要

1. はじめに
2. 調査の概要

II. 蘭嶼の自然と民族

1. 自然
2. 社会と文化
3. 歴史

III. 蘭嶼の建築に関する既存の研究(略)

第1章 居住空間の構成

I. 生活領域

II. 集落

III. 住居

1. 構成
2. 材料(略)
3. 構法
4. 寸法(略)

第2章 居住空間の FUNCTION ANALYSIS(略)

第3章 居住空間の DYNAMIC ANALYSIS

- I. 生産体系
- II. 生産組織
- III. 工作技術
- IV. 建築儀礼
- V. 生産過程

第4章 居住空間の祖型(略)

第5章 居住空間の変容(略)

序章

I. 研究の概要

1. はじめに

本研究は、太平洋上の孤島、蘭嶼を対象に、島嶼の生態系に基盤をおいた建築生産の全体を描き出すことを目的としている。

このことには、二つのねらいがある。一つは、閉じた生態系の中で小規模な集団によって行われる建築生産の具体的な姿を示すことである。もう一つは、アジア東南部やオセアニアの建築の伝統を知る上で重要な位置にある蘭嶼について、現在可能な限りの資料を残すことである。

現在、蘭嶼には2つの伝統的な集落と約100戸の慣習家屋が残されている。本研究ではそれらの悉皆調査と伝統的な生産を行ってきた島の古老達への聞き取り調査によって、上記の目的を達成しようとした。

報告書は、目次に示した内容の第1編と、実測図集の第2編で構成されている。本梗概は報告書の案内として、調査地の概要・建築構法・建築生産の概要がわかるように第1編の内容を抜粋したものである。統計的な処理や尺度・図面・文献等は報告書を参照されたい。

2. 調査の概要

本研究は、以下の現地調査に基づいている。

期間

1. 1983年8月9日～8月18日
2. 1984年4月20日～5月10日
3. 1984年7月29日～9月9日

内容

- ・住居の実測 (Iraralay・Ivalino・Iranomilek・Iratay・Yayo・Imorod)
- ・集落のアリゲード測量 (Iraralay)
- ・vahay (nijingjing) の建設過程の調査 (Ivalino)
- ・住宅形式の悉皆調査 (Iraralay・Ivalino)
- ・古老への聞き取り調査 (Imorod・Iraralay・Ivalino・Yayo)

II. 蘭嶼の自然と民族

蘭嶼(*)は、台湾の南端から東へ約74km、北緯22°00'から22°06'、東経121°29'から121°36'の範囲に位置する。南方のフィリピン・バタシ諸島とはバシー海峡で隔てられている。北方には緑島(火燒島)があり、更に北上すれば日本の南西端、与那国島に達する。この島の住人は、ヤミ族と呼ばれる海洋民族である(**)。以下に、島の自然とその住人について、その概要を述べる。

(*)

中国の文献上では、諸蕃志の“談馬顔”，島夷誌略の“答陪”が蘭嶼と言われる〔移川1931〕。また、東西洋考や台海使差録には“紅頭嶼”として記されている。西欧世界では17世紀中頃の海図中に、“Tabaco Xima”の名が見られる〔Asai 1936〕。日本統治時代の呼称は紅頭嶼(こうとうしょ、Botel Tobago)であったが、戦後中華民国の一部となってからは、蘭嶼(ランユー、lan yu, Orchid Island)と呼ばれている。

(**)

蘭嶼の住人の呼び名をやミ(yami, 雅美)としたのは、鳥居龍藏である。この言葉を、人の住む場所またはそこに住む人を意味する接頭語iと北風(冬の季節風である)を意味するamiの合成語と考えると〔Scheerer 1906〕、南方の島嶼の住人との対比で付けられた名称と考えられる。

尚、この接頭辞i-(y-となる時もある)は、ヤミ語及びそれ以南のフィリピン諸語に共通するものであるが、北方の日本の南西諸島にも、i-やy-で始まる島名は多い(与那国、石垣、西表、池間、伊良部、伊江、伊是名、伊平屋、与論、屋久)。yakuについては、移川の考察がある〔移川 1931〕。

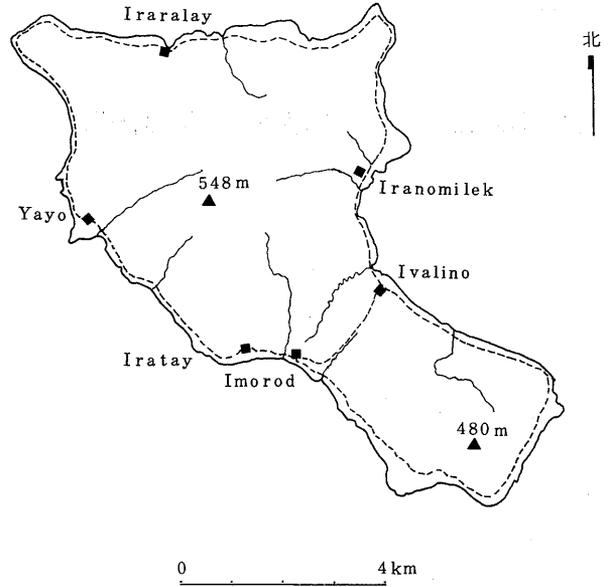


Fig. 2 蘭嶼

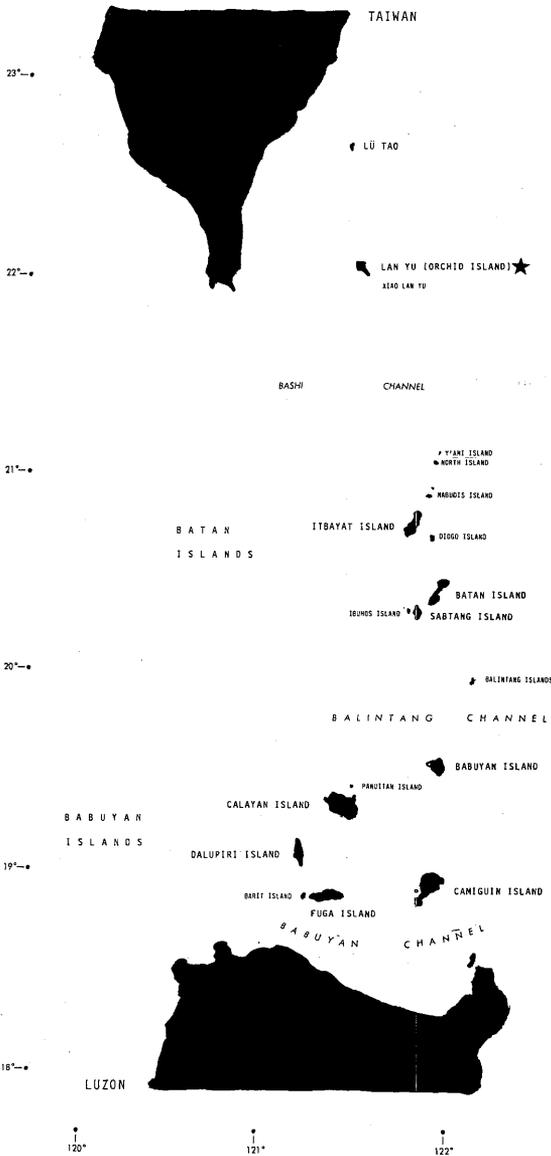


Fig. 1 台湾-ルソン島間の島嶼

1. 自然

1-1. 地形

島の面積は45.7km²、周囲38.4kmであり、中央部に海拔548mの芳蘭峰(紅頭山)、東南部に海拔480mの望南峰(大森山)がある。

蘭嶼は、フィリピン海プレートがユーラシアン・プレートにもぐりこむことによって生じた火山島である。この誕生のメカニズムは、日本の南西諸島からフィリピンのバタン諸島・バブヤン諸島に連なる一連の火山島と同様である。ほぼ全島が凝灰岩・安山岩・石灰岩等の山で構成され、急勾配の斜面がいたる所に見られる。海岸線は殆ど岩場で、砂浜は河口に僅かに見られるにすぎない。川に沿って扇状地が発達している他は、平坦地はいたって少ない。

1-2. 気候

季節風が夏と冬で逆転する、いわゆるモンスーンの現象がみられる。夏は南西から湿潤な赤道西風が吹き、頻繁に台風も来襲する。冬は北東の季節風が吹く。東南アジア大陸部では、この時期が乾季となるが、蘭嶼に来る季節風は、太平洋上で水分を補給してくる。結局、一年を通じて降水量は多く(2月から6月にかけてが比較的少ない)、年間で約3000mm、平均相対湿度も一年中ほぼ90%である。

1-3. 生物

このように乾季に欠ける蘭嶼の植生は熱帯降雨林となり、豊富な樹種がみられる。蘭嶼に生息する動物は、北方の緑島・南方のバタン諸島と類似する。生物地理上のウォレス線 Wallace's line とウェーバー線 Weber's line の間に挟まれ、いわゆる Wallacea の一部であり、その北端に位置している〔鹿野 1941f〕。沿岸には魚介類が豊富である。特に例年春頃になると、黒潮の流れにのっ

て飛魚等が大量に回遊してくる。

2. 社会と文化

2-1. 言語

ヤミ語は、オーストロネシア語族の西部語派に属する。オーストロネシア語族の分布は、東南アジアの島嶼部からオセアニア、西方ではマダガスカル島にまで及ぶ広大なもので、海を舞台に行われた壮大な民族移動の様子を物語っている。ヤミ語は西部語派中でも特にイバタン語・イトバヤット語等と近い。これらはバシイック(Bashiic)諸語と総称されている(山田 1974)。

ヤミ語の音声表記は、本論文では(TSUCHIDA 1980)に準拠した。但し、/ch/は/c/で、/ʻ/は/h/で、/r/は/z/で置き換えている。

子音：

(閉鎖音)	p	b	t	d	c	j	k	g
(摩擦音)	v	s	h					
(鼻音)	m	n	ng					
(流音)	r	l	z					
(半母音)	w	y						

母音： a e i o

注：/c/ [tʃ], /j/ [dʒ], /h/ [R, Y, u], /ng/ [ŋ]
/r/ [ɾ, ɹ], /l/ [l, ɭ], /z/ [ʒ], /e/ [ə]

2-2. 生業

タロイモ・ヤムイモ等の根菜類は、東南アジア大陸部あるいはその周辺で栽培化されたと考えられている。そのうち熱帯系のイモは、オセアニアへ拡がり今日見る根菜農耕文化を作り上げ、暖温帯系のイモは北の照葉樹林帯で雑穀栽培と結び付き照葉樹林文化を形成することになった(佐々木 1982)。暖温帯系のイモは収量が劣り、それを補う貯蔵可能な作物として雑穀が結び付いていたのである。雑穀と同時に栽培されていた稲はやがて主要作物として選択されるようになり、それが拡がってアジア東南部の稲作文化圏が形成される(*)。

ヤミ族の生業は、熱帯に展開した根菜農耕が中心である。稲作は蘭嶼に達しなかったのである。イモは脂質・蛋白質が雑穀・稲より少ない。そこでその補給のため、ヤミ族は沿岸魚を大量に捕獲する。

このような生業の体系で食されるのは、主に以下のようである。

1. 栽培植物

栽培されるイモは、①タロイモ：水田のミズイモ soli, 焼畑のサトイモ kitan ②ヤムイモ：畑のダイジョ ovi・ハリイモ patan ③焼畑のサツマイモ wakay(中央アメリカ原産)等がある。イモは貯蔵が難しいので、必要に応じて収穫される。日常の食事ではこれらのイモを水炊きした後皮を剥き、魚を副食にして食べる。同じく水炊きし

た後、擦り潰して食べる料理 inavosang もある。

粟 kaday が焼畑で栽培されるが量は僅かで、美食または救荒用である。穂刈りで収穫され、穂付きのまま貯蔵される。必要に応じて臼と縦杵で脱穀し、水炊きして副食なしで単独に食べる。水を加えて粉にし、それを葉に包んで水炊きした料理 nitektek もある。

以上のうち、soli と kaday は多くの儀礼で重要な役割を担う作物である。この他、様々な果樹類—バナナ vineveh・リュウガン cyay・ヤシ nyoi・ミカン vazacinok, kasizo 等やカボチャ pingyao・サトウキビ onas 等が食用に供される。

2. 魚

魚は全て oyod(男女ともに食べられる)か rahet(男のみ食べられる)に大別されている。当座食べるもの以外は乾燥して保存する。真水または海水を用いて水炊きするのが普通の調理方法である。但し、特定の部分は生食され、また焼く調理方法も知られている。漁労は年間を通して行われるが、回遊魚の捕獲はほぼ2月から5月にかけてである。この時期には、昼間の小型船による漁の他、大型船 cinedkeran や小型船による夜の松明漁も行われる。漁労に関する様々な儀礼は殆どこの時期に集中している。魚の中でも季節に応じて回遊してくる飛魚 alibangbang(oyod)・イソマグロ vaoyo(oyod)・シイラ arayo(raheta)は特に重視されている。

3. 家畜

豚 kois・鶏 manok・山羊 kagling が飼育されている。これらは儀礼時あるいは多くの手伝いを呼ぶ時等に食される。通常は水炊きで調理されるが、特定の部分は生食される。

(*)

稲が水稲耕作の形式で根菜類を押し退けて大量に栽培されるようになると、巨大な貯蔵施設が要求されることになる。これは建築に多大の影響をもたらしたと考えられる。

2-3. 人口

蘭嶼の人口は戦後島外の経済と結び付いて増加し、現在約3000人程である。根菜農耕と沿岸漁労で維持できる人口(島嶼の生態系の極相における人口)は、日本統治時代の統計から見ると1300人~1700人程と考えられる。それ以前は厳密な統計資料に欠くが、断片的な記録(*)による限り、少なくとも17世紀以来、蘭嶼の人口にそれほど大きな変動はなかったと思われる。

(*)

1877年の清朝の記録では、住人の総数を約千余人(鳥居 1902d: 366), 1873年の徐阿錦の記録では六七百人(ibid: 363)としている。更に遡ると、オランダ東インド会社バタヴィア総督府の1644年の記録では、約千人(村上・中村 1972: 243)又は武装可能な人数が千人(ibid: 252)と予想している(デ・ホープ号の記録。オランダは本格的な探険はしていないが、通訳にする目的で蘭嶼から住人を連れだしている)。

2-4. 親族

血族 zipos

ziposは血縁による親族で、その範囲は通常、父 ama・母 ina・兄弟姉妹 kakteh・子 anak・孫 apo・祖父 akai・祖母 akes・おじ maran・おば kaminan・おいとめい mankakteh・いとこ katisa である〔衛・劉 1962:57〕。

姻族 icyarowa

icyarowaは、婚姻による親族で、その範囲は通常①自己の配偶者およびその zipos, ②子の配偶者およびその両親・兄弟姉妹・子, ③兄弟姉妹の配偶者およびその両親・兄弟姉妹・子, ④父母の兄弟の配偶者, である〔ibid.:59〕。

2-5. 生活集団

ヤミ族の生活集団の最大の特徴は、同居集団の自律性が高いことで、そのためヤミ族の社会には階級や首長等が存在しない。漁場・灌漑水路の確保等は同居集団では管理が難しく、それを越えた集団が形成されるが、その結び付きはゆるやかなものである。

集落共同体 ili

集落構成員は kiliyan と呼ばれる。

現在、島内には Imorod (紅頭 イモロド)・Iratay (漁人 イラタイ)・Yayo (椰油 ヤユ)・Iraralay (朗島 イララライ)・Iranomilek (東清 イラヌミルク)・Ivalino (野銀 イバリヌ) の六つの集落がある。

1897年の鳥居の調査時点では「イバタシ」(Ivatas : yayoの南の集落 2戸)「イワウォ」(Iraralayの東の集落 3戸)の合計8村があった〔鳥居 1899〕。この二村は数戸からなる小規模な集落で、それが25~50戸程の集落と併存していた。1644年のオランダ東インド会社の記録では、当時蘭嶼に11の集落があったことになっている〔村上・中村 1972:252〕。

同祖集団—幹族 asa satenge または 枝族 asa itetngean

集住を原則とし、父系に基づいて構成される。水田の水路・果樹林・放牧地などを管理し、後述の粟耕作集団・舟組の母体ともなる。

粟耕作集団 cicipnen

いくつかの同居集団が共同して、畑の火入れ・播種・収穫・農耕儀礼を行う。

舟組 kakawang

大型船 cinedkeran (6人~10人乗り)を共同所有し、夜間の松明漁を行う。

同居集団 asa ka vahay

一つの敷地内に居住する集団で、漁労・根栽農耕など、日常的な生産活動の殆どを独立に行う。

同居集団は夫婦とその未婚の子供(核家族)で構成されるのが原則である。但し世代交替時には、一時的に息子夫婦等が同居して、大家族となることがある。

1957年では、蘭嶼の世帯数416戸・人口1560人中、核家

族居住が357戸で86%、大家族居住が37戸で8.9%であった〔衛・劉 1962〕。これによると、大部分が核家族居住である。しかし、日本統治時代、同居集団の構成はこれと異なり大家族居住の比重が高かったと考えられる。1957年の調査では世帯人数は3.75人だが、1910年から1936年の統計では、世帯人数は4.2~5.1人である。更に日本統治時代の初期、1906年は世帯数219戸・人口1427人で世帯人数6.5人〔国分 1952〕、1897年は世帯数約201戸・人口凡そ1200~1300人で世帯人数約6.0~6.5人〔鳥居 1899〕であった。

3. 歴史

3-1. 来住

蘭嶼にどのような人類が何時から住むようになったかは定説がない。現在の住人の中に見られるネグリトの形質から、モンゴロイド来住以前にオーストラロイドの存在を設定する場合もあるが〔Scheerer 1906〕、依然仮説に過ぎない。言語はバタン諸島と類似するが、それは移住が南方から行われたことを意味してはいない。始祖伝説では竹や石からの人類誕生が語られるが、このことはヤミ族の歴史の古さを示すだけである。

現在までのところ蘭嶼での人類の存在は、甕棺葬に関する研究から、約8世紀まで確認されている。ヤミ族の葬制は、遺体を布でくるんで土葬する形式である。しかし、現在では使われない遺体を納める甕棺が、しばしば発掘されている。R. B. Stampsは、自身で発掘した甕棺の年代を放射性炭素年代測定法を用いて調べ、約780A. D. (1170±145B. P.)の値を示すサンプルを得ている〔Stamps 1979:183〕。即ち8世紀には既に蘭嶼に甕棺で埋葬を行う人達がいたことになる。但し、この甕棺文化の移住者達が、ヤミ族の直接の祖先であるとは限らない。

3-2. 航海時代 (18世紀頃まで)

ヤミ族の口承や、バタン諸島に布教した宣教師達の記録から、ヤミ族は大型船 avang でバタン諸島と往来しており、その時期は18世紀頃まで続いていたらしい〔徐 1983a〕。それは交易ばかりでなく、移住を伴うものであった。当時の蘭嶼は、バタン諸島と共に一つの生活圏を構成していたと考えられる。

しかし、バタン諸島は西欧植民地支配の影響で、蘭嶼とは異なる道を歩むことになった。17世紀の後半に既にスペインの宣教師が入り込んでいたが、1783年にはスペイン軍が侵入し、バタン諸島は武力で征服されてしまうのである。この時代のスペインの影響は絶大で、島民の強制移住や逃亡が繰り返された。F. Blumentrittはスペインの宣教師の記録から、バブヤン諸島の住民はバタン諸島に移住し(バブヤン諸島にはイロカノが入ってくる)元来のバタン人はイトバヤット島のみに残り、一部は蘭

嶼に逃れたらしいと推測している〔Scheerer 1906〕。こうして蘭嶼とスペイン支配下のバタン諸島の交渉は途絶することになった。

この時代の台湾本島との交渉はどうだったのだろうか。台湾本島は本来ヤミ族と同じオーストロネシア系の住民が殆どで、特に海岸近くに住む諸族とは往来があったと考えられる。しかし、台湾本島には早くも16世紀に西欧勢力が登場してくる。最も積極的だったオランダ東インド会社は覇権をめぐる明と争い、ついに1624年、台湾占領に成功する。丁度、明と清の交替期であり、この頃から漢人の移民が増加する。オランダの支配は長くは続かず、やがて1661年に明の鄭成功によってその勢力は一掃される。続いて1683年には清朝が侵攻して、福建省台湾府が成立するのである。清朝時代、福建・広東方面からの移民は更に増加した。漢人の勢力に圧迫された先住民は、同化されるか移住を余儀なくされた。このように早期に漢人支配が確立した台湾本島とは長い間交渉がなく、ヤミ族にとって口碑伝承にも殆ど姿を見せない存在となったのである。

この時代に、オランダ人や漢人は蘭嶼を訪れている。しかし、ヤミ族を支配するには到らず、また経済的な影響も殆ど無かったと思われる。オランダ東インド会社の記録や「東西洋考」〔張 1617〕・「台海使差録」〔黄 1736〕等に断片的にこの時代の蘭嶼の様子が記されている。

3-3. 孤立の時代 (18世紀から1895年まで)

バタン諸島とも台湾本島とも積極的な往来の無い時代である。島嶼の閉じた空間の中で、ヤミ族の文化は展開した。

清朝は、蘭嶼に対して1877年(光緒3年)、二十数名からなる視察団を派遣し、調査ののち恒春県の管轄下においた。しかし、政治的には放任されたままで〔鳥居1902d〕、ヤミ族の伝統社会は大きな変化を受けなかったと考えられる。

この時代の蘭嶼については、上記の清朝の視察団の報告の他、1873年(同治12年)の除阿錦の渡航記録等がある。

3-4. 日本統治時代 (1895年から1945年まで)

日清戦争の結果、台湾本島及び蘭嶼等の属島は日本の支配下におかれた。蘭嶼が政治・経済的にかつてない程の繋がりを外部と持つ時代である。即ち、日本政府は1903年 Imorod に紅頭嶼警察官吏派出所(1908年に紅頭嶼蕃務官吏駐在所、1913年に紅頭嶼警察官吏駐在所と改称)を置き、1918年には交易所、続けて1923年には紅頭嶼蕃童教育所(1928年紅頭嶼教育所と改称)を開設して理蕃政策を押し進めた。警察の介在で集落間あるいは同祖集団間の争いは激減した。また、交易によって鉄の入手が容易となり、生産性が向上した。それまでに畑作に使わ

れていた分銅型石斧はこの時期に鉄の鎌に置き変わったと言われる。しかし、基本的には島嶼の生態系に依存した経済には変わり無く、固有の文化は殆ど維持されていた。

この時代の初期、1897年に鳥居龍藏の人類学上の調査が行われた。以来、蘭嶼に関する科学的な研究は今日まで盛んに続けられている。

3-5. 中華民国時代 (1945年以降)

日本の敗戦によって、蘭嶼は中華民国の一部となった。政府は学校・コンクリートの住宅・発電所等の近代的施設を建設した。観光を目的とした来島者が増え、ホテルや商店も作られた。中国語教育で育った多くの若者は、職を求めて島を出るようになった。こうして、島外の経済と結び付くことによって、島嶼の生態系を基盤に成立した伝統的な生活文化は大きな変容を余儀なくされている。

この時期における居住空間の変容は大きい。台湾政府は鉄筋コンクリートの住宅(国民住宅)を島内の6村に無償で提供し、Iraralay・Ivalino 以外は伝統的な進落を取り壊す政策を実施した(*)。その結果、この2村以外では伝統的な住居は殆どみられなくなった。また、伝統的な集落は残されても、それに隣接して国民住宅が建てられたので、住人はこの二つの家を使い分けているのが現状である。

(*)

1966年から1980年までの間に、「改善蘭嶼山胞生活計画」「加強社会福利措施改善蘭嶼山胞住宅計画」により566戸の国民住宅が建てられた。

第1章 居住空間の構成

I. 生活領域

蘭嶼はほぼ全島が急峻な山で構成されている。しかし、いくつかの川沿いには扇状地が発達し、また河口は砂浜になっている。このような扇状地の空間は、豊かな水に恵まれ、舟着き場となる砂浜に近く、また集住するのに適した平坦地(厳密には傾斜地)を提供している。現在の集落は全てこのような扇状地上に作られている。集落の背後にはきりたった山がそびえ、様々な生活財・食料の生産地として利用されている。そこから流れる河川や泉の水を利用して水田や水場が作られている。集落からは青い海が見渡せ、漁場の様子を知ることができる。建築は集落に集中するが、畑・水田には出作り小屋 saro-wap が、港には舟小屋 kamalig がつくられている。

Tab. 1 生活領域の構成

自然界	集落 ili	水場 ranom	墓地 kami towan	茅場 kayocidan	山林 kahasan	果樹林 mowamowa	畑 niakawan	水田 ahakawan	山羊放牧地 palaman	港 vanowa	漁場
山	—	—	—	●	●	●	●	●	—	—	—
扇状地	●	●	—	—	—	—	●	●	—	—	—
海岸	—	●	●	—	—	—	—	—	—	●	—
海	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●

II. 集落

集落は同居集団の屋敷地・共有の通路等で構成され、集落の中心となる広場や集会施設等をもたない。豚小屋 pakakanan so kois や薪の乾燥棚 sinaboway が集落外周部に置かれる。屋敷地の配置に規則性は無く、集落境界もあいまいである。

同居集団は集落共同体の中にいくつかの同祖集団を形成している。1900年代の初め頃までは、この同祖集団は集落内でまとまって住み、その境界も明確だったと言われる。かつては同祖集団間に争いが絶えず、同じ集落内でも同祖集団の集住する領域の間には比較的大きな空地が残され、そこで戦闘が行われることもあった(*)。日本統治時代にこのような争いが減ると、集落密度は高まり、同祖集団の集住もそれほど重要では無くなっていった。現在見る密度の高い集村は、その変容の結果である。

(*)

ヤミ族の戦闘は規制された争いである。それは、お互いの罪状を声高らかに数え上げることから始まり、一定のルールに従って進行する。通常、人命を奪うことは忌避されるが、命をかけての決闘も行われることがある。以下の事例は、Irralalay の Siaman Parogsoe によるものである。

Irralalay ではかつて集落のほぼ中央(現在、長老教の教会が建っているあたり)は、インフォーマントが少年の時には人は住んでいなかった。インフォーマントの四代前、ここで二つの同祖集団 Sira do kanalán と Sira Gazetgot が戦闘を行った。早朝から投石とこん棒による乱闘が行われ、昼になってから槍の闘争になった。これは命懸けである。二つの集団が空地を挟んで向かい合い、年長者から順番に一人ずつ交替に人が出てその空地を走り抜ける。すると、敵が槍を投げつけるのである。それぞれ一人が槍の犠牲になってようやくこの騒ぎはおさまったという。

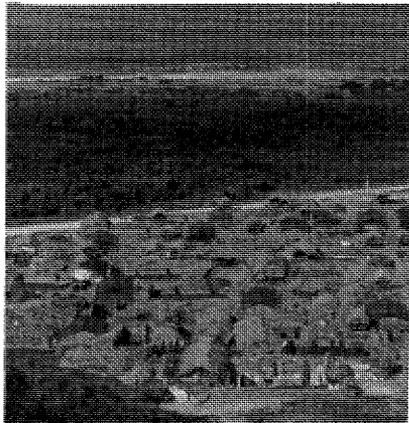


Fig. 3 Ivalino 村

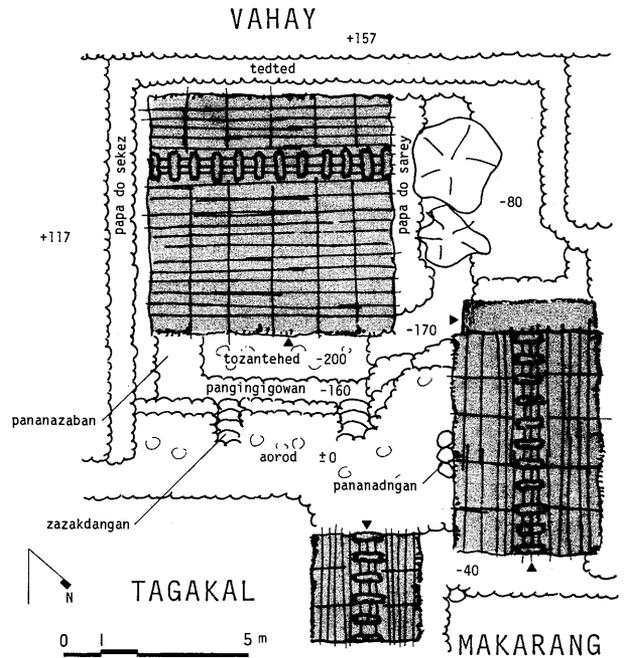


Fig. 4 住居の構成 (Ivalino 村)

III. 住居

1. 構成

同居集団の居住する屋敷地 sako 内には、主屋 vahay・副屋 makarang・涼台 tagakal・高倉 alilin・鶏小屋 vahay no manok などの建築が設けられる。建築の向きは、海と山を結ぶ線、即ち海陸風の方向で決定されている。その軸線に対して、vahay・alilin は棟を直交させ、makarang・tagakal は棟を平行に配置する。ヤミ族はこのような複数の建物を用途に応じて使い分けている。但し、最低限必要なのは vahay だけで、特に alilin や vahay no manok は省略される事が多い。

1-1. 外部空間

屋敷地の屋外部分は、玉石と芝生で仕上げられている。前庭 aorod の一角には、通常背もたれ石 pananadngan が数個並んで埋めこまれている。ここは夜間満天の星空を仰ぎ見る最高の場所である。魚の乾燥棚 zazawan・板の乾燥棚 ipanopit も前庭に設けられる。

1-2. vahay

vahay と呼ばれる。日常の調理と休息の場である。

vahay は、正面の壁に並んだ出入り口の数に応じて形式が異なり、それぞれ名称が与えられている(→Tab. 2)。

vahay は地床の地下住居である。即ち、屋根だけが地上にあらわれ、建物本体は通常の歩行面の下に作られている。vahay の海側には床面より一段低く前庭 tozantehed を設ける。vahay に入る時は石段を下ってその前庭に立ち、そこから腰を屈めて軒先をくぐるのである。内部空間は、階段状に構成されている。cinangbadan では、前廊から後室まで、通常3つのレベルがあり、横に細長い部屋が作られている。

Tab. 2-1 vahay の形式(1)

名 称	mivazay	tomok の数	tangbad	入口 の数	その他
cinangbadan	●	2	●	4, 5	前廊+前室+ 後室
nijingjing	●	1	—	3	一室住居+ 前廊
valag	—	0	—	1, 2	一室住居 (+前廊)
pinakeb	—	0	—	1, 2	= valag
pinatoi	—	0	—	2	石壁の valag

Tab. 2-2 vahay の形式(2)

名 称	入口の数
alima so sesedepan	5
apat so sesedepan	4
atlo so sesedepan	3
adowa so sesedepan	2
asa so sesedepan	1

1-3. makarang

vahay の機能を補完する。

前庭 tozantehed とほぼ同じ高さに立つ高床の建物で、床下部分は前庭 aorod から見れば地下室になる。正式の makarang は saza と呼ばれ、vahay に匹敵する程のエネルギーを要する建築である (→ Tab. 3-1)。saza の高床部分は、天井板・側壁・妻壁・床板で囲った箱と見なすことができる。その木箱の周囲を覆うような形で、屋根・石積み壁・茅壁が作られるのである。

入口の構成から、makarang は 2 種類に分かれる (→ Tab. 3-2)。集落毎にほぼ形式は一定で、冬の季節風の風下側に主たる出入口を設けることが原則となっている。

Tab. 3-1 makarang の形式(1)

名称	mivazay	特徴
saza	●	正式。壁・天井全体を板で作る。
raong	—	簡略な形式。高床部分は tagakal と同様に作る。

Tab. 3-2 makarang の形式(2)

名 称	集落名	特 徴
北東海岸 形 式	Iraralay Iranomilek Ivalino	海側・山側の 2 箇所の出入口を持つ。山側の出入口は vahay の前庭 tozantehed に通じ、地下室 obo へはそこから出入りする。山側に差し掛け屋根を設ける。
南西海岸 形 式	Imorod Iratay Yayo	海側だけに出入口があり、上記の形式の山側と同様に作られている。obo への出入りは海側から行い、また差し掛け屋根も海側にある。

3. 構法

3-1. 接合部

部材の接合は、以下の手法の組み合わせで行われる。

1. 接合面の加工

(1) 突きつけ (2) 相欠き (3) ほぞ (4) わなぎ込み

2. 部材形状の特殊加工

3. 接合補助材

(1) 緊結材: vazit・wakay 等。

(2) 木栓 yoray: 直径 8 mm~16 mm の円筒形に削り出した木片。丸のみであけた穴に 10 cm~30 cm 間隔で打ち込む。以下の 2 形式がある。

1. 木釘として、重ねた板相互あるいは板と柱を接合する。

2. だぼとして、板をはぐ時に使う。

yoray は造船でも用いる。バタン諸島では、既に 17 世紀に用いられている技術である [Dampier 1697]。

3-2. 柱

柱は、堀立柱である。地中及び床下の部分を円形またはそれに近い多角形とし、その上部を長方形断面に加工するのが基本である (*)。

柱の断面形状を長方形とするのは、フィリピン・ルソン島北部山岳地帯の諸民族や台湾高砂族の住居に典型的である。その他では、オセアニアにも拡がっていた痕跡があり、ニュージーランドのマオリ族はやはり長方形断面の柱を使っている。日本でこのような柱は稀だが、対馬の近世民家にはこの形式が見られる。また各地の古代の遺跡からもいくつか長方形断面の柱の実物が発掘されている (**)。こうしてみると、アジア東南部からオセアニアにかけて、かつては広範囲に分布していた可能性が考えられる (***)。このような断面形状に柱を作ることは、機能的にはあまり意味がない。板壁構造の建築文化から生まれた一つの伝統ではないかと考えられる。

(*)

東南アジアでは、柱の断面形状は原則として円形または正方形である。しかし、二種類の異形断面の柱が知られている。一つはここにあげた長方形断面の柱、もうひとつは丁度ドーリア式のように、軸方向に溝の入った円柱である。後者はそれほど一般的ではなく、ニアス島・ボルネオ島等の一部に限られる。

(**)

1. 静岡県田方郡韮山村の山木遺跡 (弥生時代後期から古墳時代初頭) から出土した柱は、全長三分の二が直径 11 cm~16 cm の丸太、残りは 11 cm~12 cm × 5 cm~6 cm の長方形の断面で、その境界部分に床を付けたとされている [後藤 1962]。

2. 秋田県から、平安時代中後期頃と見られる埋没家屋がいくつか出土している。北秋田郡鷹巣町小ヶ田 (旧名小勝田) で 1817 年に現れた家については、岡見知康の記録がある (平田篤胤が 1821 年に写しとり、それを『皇国制度考』に載せている)。それによれば、柱は一尺一寸 × 三寸 (長さ六尺二三寸) の長方形断面であった。このような柱の存在は近年の発掘で確認されている。男鹿市脇本字小谷地の発掘 (1964 年から 1966 年) では、17 cm × 7 cm (長さ 155 cm) の断面の柱が出土し、鷹巣町綴子字胡

桃館の発掘(1967年から1969年)では、18cm×10cm、7cm×13cm、11cm×28cm等の堀立柱が出土している(永井 1975)。
3. 藤原宮第41次調査中に藤原宮の前身建物が発見された(1984年)。その遺構から、長方形断面の柱が出土している。

(***)

厳密には、①地下埋設部分及び床下部分を円形またはそれに近い多角形とする形式(ヤミ族・山木遺跡) ②地下埋設部分も上部と連続した長方形とする形式(フィリピン等)の二通りある。

以上のような形式の他に、いくつかの特殊な柱が用いられている。

1. 親柱 tomok (tozak)

熱帯降雨林で見られる板根現象(butressing)を利用して作られるばち型の柱で、通常前面に山羊の角 orong 平行紋 tagtagran が彫刻されている。vahay の中心に立つ棟持柱 kananarowan で、最も重視される建築部材である。

tomok は精神的な価値が高い。家の命 pahad no vahay と言われ、遺産相続等に家屋を分解して兄弟で分配する時も、tomok だけは敷地を離れることがない。また古くなっても焼却処分にはされず、朽ち果てるまで敷地内に放置される。tapa の式、tavatavak の式、mipazek の式等の諸儀礼は、この tomok を中心に行われる。しばしば本来の棟持柱の機能を失って装飾化し、後壁 saop 近くに置かれる。

2. 隅柱 karoyowan :

壁が交叉する部分に設けられる柱で、通常断面形状を十字型またはT字型にする。

3. 縁柱 ayi no sesedepan

vahay や makarang の最も海側の柱に板をはめ込んで、風雨の侵入を防ぐ時に用いる。

柱には縦に溝を掘り(あるいは溝を貫通させ)、そこに板が納まるようにしておく。このような柱が使用されるようになったのは、日本統治時代以降のことであると言われる。

3-3. 横架材

1. 棟木 sapawan

断面形状は、二等辺三角形が基本である。両脇に垂木受け pasosowan を緊結し、その上に垂木をのせる。棟持柱とは突きつけまたはほぞぎしで接合し、緊結材で固定する(緊結材は柱上端にあけた穴に通す)。

このような三角形断面の棟木は他のいくつかの地域でも見られ、その分布の範囲は大略長方形断面の場合と類似している(*)。

2. 母屋桁 panyakdan

柱の上端を繋ぎ、垂木 pakaw を支持するための部材で、棟木と平行に用いられる。柱とは突きつけまたはほぞぎしにして緊結材で固定する(柱上端にあけた穴に緊結材を通す)。

3. 梁 mipososok

vahay の後室 dovhay に用いられる板状の梁で、棟木と直交し、tomok と二つの母屋桁を繋いでいる。tomok とは相欠きで接合し、母屋桁とは緊結材で固定する。

4. 床桁 ransan

床板 tapi を一体化するための部材で、棟木と平行に用いられる。vahay では、床板の端部(ransan do owan)及び下方(ransan do avowan)に用いる。makarang・tagakal・alilin では、柱で上方に支持され、床板を支える。

(*)

日本の唯一の例は、1817年に出現した秋田の埋没家屋である(→3-2)。当時の記録者によると、ほぼ三角形の断面の部材が長方形断面の柱上にのるとされている。厳密には頂点に約3寸の幅があり、下辺は9寸、側辺は1尺1寸の大材であった。「梁」とされているが、棟木と考えるべきであろう。オセアニアでは三角形の棟木の例はいくつか知られている。マオリ族の住居は長方形断面の柱とともにこの棟木を用いている。

3-4. 床

床仕上げ

床板は、その背面・短辺方向に反りを防ぐ為のリップを作り出すことが多い。

vahay の後室 dovhay・前室 dosepaid 及び saza では床板を床桁 ransan に木釘で固定し、相互もだぼではぐのが普通である。その他では、通常木釘・だぼは省略される。

vahay では海側を頭にして眠る。その為に床面は水平にはせず、5/100~15/100程度の勾配で海側を高くしている。

床構造

vahay は地床構造で、整地した上に玉石を置き、その上に床桁 ransan と床板をのせる。

makarang・tagakal・alilin は桁はめこみ式の高床構造である。床桁に長方形の穴をあけ、そこに柱を通して円形または多角形に断面が大きくなる部分で床板を支える。中間に床桁を用いる時は、その両端を棟持柱で支持し、途中を束柱で補強する。簡易な形式では、二股の柱を利用して床桁を支えることもある。

アジア東南部で一般的に用いられる高床構法は、これとは異なり以下のような形式である。

- (1) 貫式一柱に貫を通してそこに床を作る。
- (2) 添柱式一小屋組を支える柱とは別に、床を支える構造を持つ。
- (3) 積層式一建物全体を他の架構で上に持ち上げる。床面で構造が分れる。建物を支持するために、束柱・校倉等が使われる。

これらに対して、桁はめこみ式の高床は、台湾から日本にかけての地域でその使用が確認されるに過ぎない。

台湾本島の高山族は、地床の住居に住み、倉を室内におくこともあるが、屋外に高倉を設ける時にこの構法を使う。日本では、南西諸島の高倉は(3)の積層式であるが、八丈島には正角材の柱による桁はめこみ式高倉がある。静岡県の子木遺跡(→3-2)で出土した柱はヤミ族と同形式で、桁はめこみ式の高床構法であった。日本の高倉の一つの伝統が、僅かに八丈島に残されているのである。これらの諸例から桁はめこみ式の高床建築の特徴を考えると、①ヤミ族を除いて全て収納に用いる高倉であること ②稲作以前の文化と結び付くこと(*)が指摘できる。

(*)

アジア東南部の高床建築は、貯蔵の必要な稲が主要作物となったことで成立した例が多い。しかし、このように稲とは結び付かない高床建築もある。台湾高山族は粟等の雑穀及び根裁類の栽培、八丈島はサトイモ・粟の栽培が農業の中心である。ただし、山木遺跡では水田址が発掘され、稲倉であったことが考えられる。水稲耕作導入後も、建築は稲作以前の伝統に従ったと考えるべきであろう。

3-5. 壁

1. vahay の境界壁 zeveng・pongapong・tangbad・cicipan

板壁(横)。柱との接合は木釘と緊結材の併用、板相互はだばを用いる。柱や床板との接合のために通常長辺方向にリブを作りだす。海側の面は平行紋 tagtagran・波形成 volavolaw を彫って仕上げる。

これらの壁は垂直には作らず、5/100~15/100程度後方へ傾斜させておく。このように傾けるのは①寄り掛かりやすいこと ②壁面に吊るした豚の顎骨・山羊の角が動きにくいこと ③暴風によって建築が海側に倒れやすいこと 等のためである。

2. vahay の側壁 papa・後壁 saop

板壁(横・縦)・石積み壁・茅壁(茅を竹 kawalan やオニガヤ sinasa で挟んで縛り、縛り目を茅束で覆う形式)を組み合わせて作る(板が省略されることもある)。板は簡易に作り、装飾は無く、相互の接合は緊結材によることが多い。

3. makarang の側壁 zazacit・妻壁 moing na

板の加工方法・接合方法は、vahay の境界壁 zeveng と同様である。平行紋・波形成を彫って仕上げる。

4. makarang の側壁 papa

石積み壁。側壁 zazacit と共に二重壁を構成する。

5. tagakal・alilin の壁

板壁(横)・茅壁・網代壁(割竹を三手越しに編む)の3つの形式がある。tagakal では通常板を用い、紐で柱に固定する。海側の板壁は、風雨に応じて開閉できるようにすることが多い。

3-6. 天井

1. vahay の天井 cinitay

vahay の前室 dosepanid に設けられる。小梁の一端を境界壁 pongapong、他端を垂木 pakaw に固定し、その上に板を置く。板上は、dovahay 側から収納に用いる。

2. makarang の天井 cinitay

折り上げ天井で、平行紋・波形成が彫られる。天井板を2本の竿縁 taza no cinitay 上にのせ、木釘で固定した構造で、相互はだばではぎ一本化する。

3-7. 小屋組

原則として地上から立ち上がる棟持柱 kananarowan で棟木 sapawan を支える形式である。但し、tagakal・alilin の小屋組では、棟持柱の他にアーチ状の曲がり梁 ransan no sapawan や小屋束も用いられている。

3-8. 屋根

屋根下地

垂木 pakaw は二つ割りの竹 kawalan または板である。それを母屋桁 panyakdan と垂木受け pasosowan の上にのせ緊結する。垂木上にそれと直交して屋根下地のオニガヤ sinasa をのせ、緊結材 cinay no vazit で固定する。

葺き方

茅の根元を上にして、緊結材 wakay で屋根下地に取り付ける。このような逆葺は、日本では南西諸島や大嘗宮の建築等を除き例が少ない。しかし、東南アジアの草屋根では寧ろ一般的といえる。

屋根葺き材の固定はこれだけでは強風に対して不完全なので、通常更に飛散防止の押さえ竹を屋根面に縦横に渡す。

棟仕舞

屋根頂部の棟仕舞は、葺き材を下地に縛り付けた部分を茅束で覆うという形式で、特に強風を考慮した構法である。アジア東南部では台風常襲地域に多い。ヤミ族以外では、台湾本島の高山族・フィリピンのルソン島やバタン諸島等に見られる。また日本では特に南西部に多く見られ、針目覆い等と呼ばれている(但し、南西諸島はこれとは異なるこうがい棟の形式である)。

3-9. 開口部

1. vahay の出入り口 sesedepan

前廊 sesedepan の奥の壁に1~5箇所設けられる。柱と方立ての間を板戸 pangeneban (または pazezeven-gan) がスライドするようになっている。アジア東南部・オセアニアでは、軸吊り式の引き戸を使うことが多く、このような引き戸は例が少ない(オーストロネシア系の民族では、マオリ族が引き戸を用いる)。

縁柱 ayi no sesedepan には、はめこみ板が入り、閉鎖できるようになっている。上記の戸があるため平時は必要ないが、台風の時等に使われている。

2. vahay の窓 ngoso no vahay

後室 dovahay の側壁や後壁に設けられる。窓周辺の板

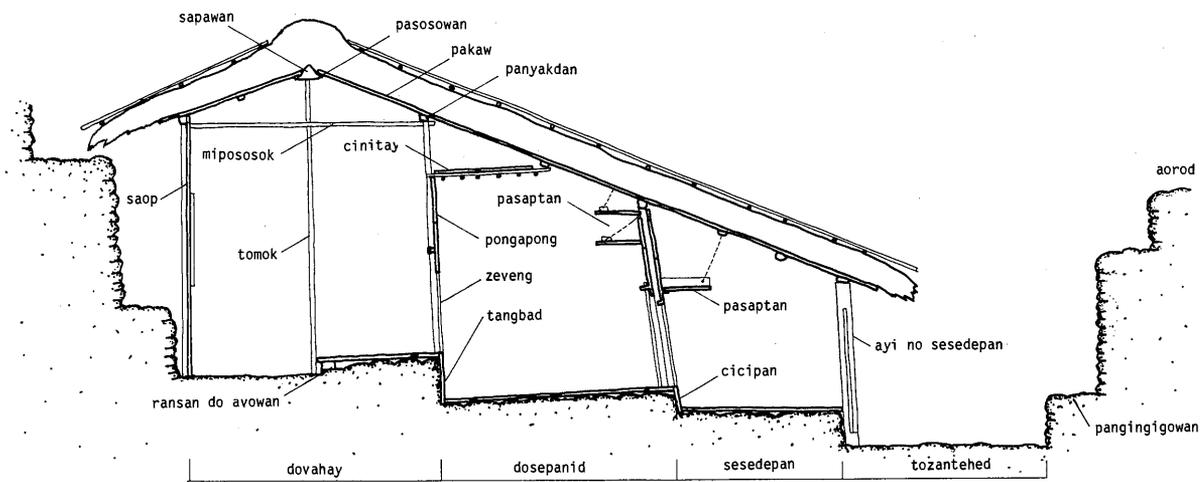


Fig. 5 - 1 vahay 断面图 (1/60)

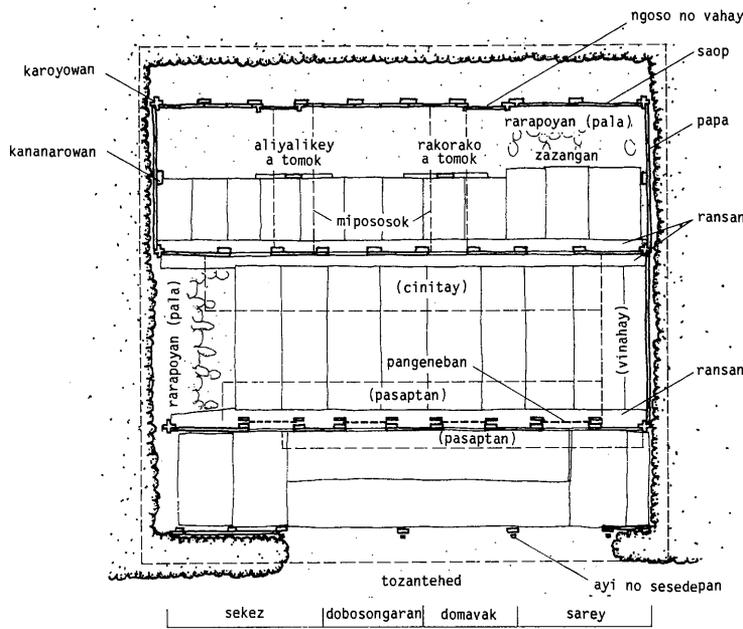


Fig. 5 - 2 vahay 平面图 (1/100)

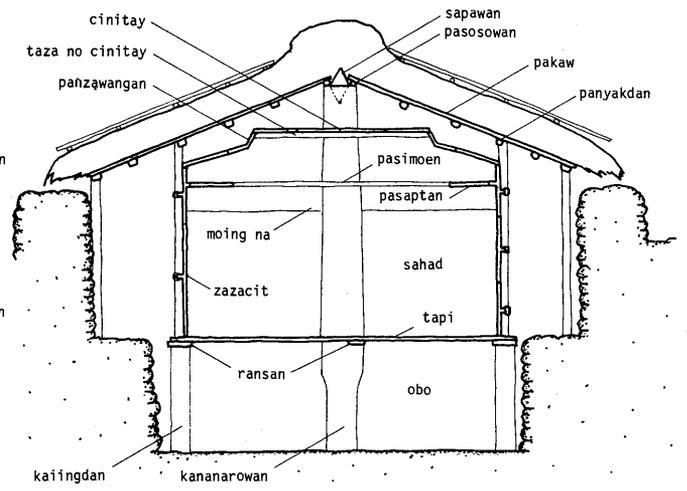


Fig. 6 - 1 makarang 断面图 (1/60)

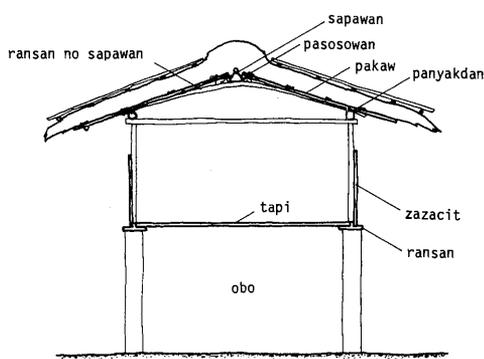


Fig. 7 - 1 tagakal 断面图 (1/60)

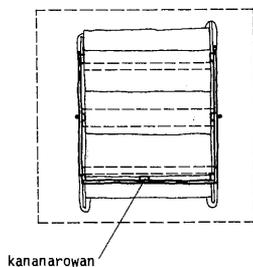


Fig. 7 - 2 tagakal 平面图 (1/100)

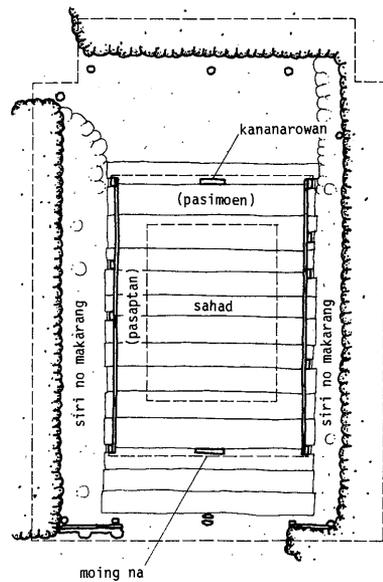


Fig. 6 - 2 makarang 平面图 (1/100)

にリブを設け、板をそこにはめ込み閉鎖する。

3-10. その他

棚

収納や乾燥の為、様々な棚が作られている。

1. vahay の収納棚 pasaptan :壁に沿って作られる。一端を境界壁 pongapong, 他端を垂木 pakaw 等に吊って固定する。
2. vahay の壁付き収納棚 vinahay :前室 dosepanid の炉の反対側に作られる。いくつかの出し入れ口を設ける。
3. 火棚 pala :炉の上方に板または竹を組んで作られる。
4. makarang の棚 pasimoen・pasaptan :梁行に pasimoen を取り付け、それに両端を支持させて pasaptan を取り付ける。側壁 zazacit と同様に、平行紋・波形紋が彫られる。
5. makarang の粟収納棚 pikakadayan :棚 pasimoen に壁を付けた形式のもので、粟の収納に用いる。日本統治時代以降の考案といわれる。

梯子

tagakal の昇降の為に、梯子が使われる。①木に刻み目をつけた形式 ②木を組み合わせた形式がある。

鼠返し avig

alilin の柱上端に用いられる。鼠の侵入を防ぐ為に用いられる普遍的な手法である。

第3章 居住空間の DYNAMIC ANALYSIS

I. 生産体系

ヤミ族の建築は全て堀立柱で作られている。堀立柱は地下埋設部分が腐朽し易く、耐久性はあまりない。しかしヤミ族は部分的な補修は殆ど行わない。倒壊の危険が来る前に、建築全体を建て替えてしまうのである。ヤミ族の建築生産体系は、このような建て替えを繰り返すことを基本とし、補修は例年行う屋根茅の補給と必要に応じて行う縁柱の交換に限られている。

このように全面的な建て替えを行うのは、住居規模を拡大したいという要求があるからで、ヤミ族社会を貫く威信競争の原理によるものと考えられる。核家族が居住するのに4つの入口を持つ cinangbadan を作る必然性はない。しかし、例えば回游魚の漁期中、舟組 kakavang に舟宿を提供するためには、主屋は是非とも cinangbadan でなくてはならないのである。このように人より抜きんでた建物を作るためには、社会的な条件が課せられる。盛大な食物の分配を伴う落成礼 mivazay の開催がそれで、建主には相応の資力が要求されることになる。そこで通常、結婚当初は valag を建てて住むことになる。そして建て替え時期が来ると落成礼の準備をして nijin-gjing を建て、次には cinangbadan を建てるのである。こ

れと平行して最初に建てた簡易な raong も、やがて正式の saza に建て替えられていく。

II. 生産組織

一般的に地域小集団の相互扶助の目的は、①ある時期に人工を集中させること ②専門化を促すこと、であるが、ヤミ族は発展した相互扶助の体系を持たないため、建設は長期化し、鍛冶・そま・大工・屋根葺き師等の専門職は見られない。

ヤミ族に見られる相互扶助 sidongen は、以下のような形式である。仕事の進行を見て集落の人 kiliyan または他村の zipos・icyarowa・友人が手伝いにくる。建主は手伝いを特別要請しない。他村の人は建主または集落の他の親戚・友人の家に泊まる。各自が朝食の後、必要な道具を携えて早朝建主のもとへ集まり、仕事を開始する。建主はその場で食べきる以上の昼食および何回かの間食を提供するのが義務である。料理はイモと魚等で、手伝いの人数が多い時には更に豚や山羊が提供されることになる。三時頃には手伝いの人は引き揚げる。その際、昼食の余りを各自が家に持ち帰り、昼食の続きまたは夕食とする。従って建主の家では相当の食事を用意する必要があり、前夜からイモを料理することも珍しくない。手伝いにきた人は、更に落成礼 mivazay で肉やイモの分配を受ける。このような食物の贈与は報酬性が強いが、これで相互扶助が完結したわけではない。手伝いにきた人が次に行く建設作業には参加することが暗黙裡に要求されているのである。

一般的には、相互扶助には次の3種類の典型的な形式がある。

1. 結社型：数名でグループを作り、構成員全員でそのうちの一人のための作業を順番に行うもの。一巡すると契約は終了し、結社は解散する。
2. 労働交換型：二者間で手伝い合うことを了承しあって労力を貸借するもの。成文化や明言されない場合も含める。貸借の関係は、結社型のように終了の時点が明確ではない。
3. 委任型：労力を物品・金銭・サービス等で得るもの。専門化した技術を持つために、労働交換では不平等を生じる場合や、何等かの事情で片方が労力を提供できない場合の解決方法である。また、二者間の社会的地位の違いなどで他方が与えるサービスに対して労力を提供する場合も含まれる。

この分類によれば、ヤミ族の相互扶助は、2と3の中間的な性格を持つものであると言える。

III. 工作技術

1. 生産工具

主な建築用の生産工具は、以下のようなものである。

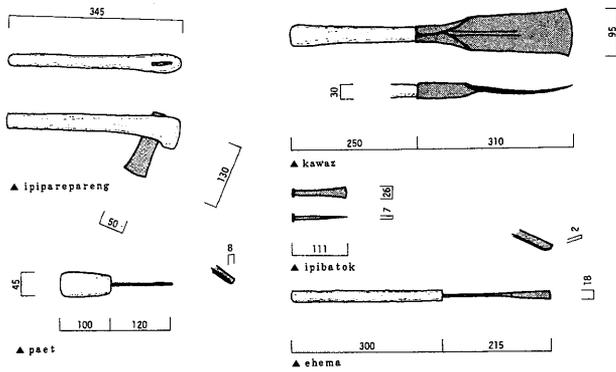


Fig. 8 主要な建築用生産工具

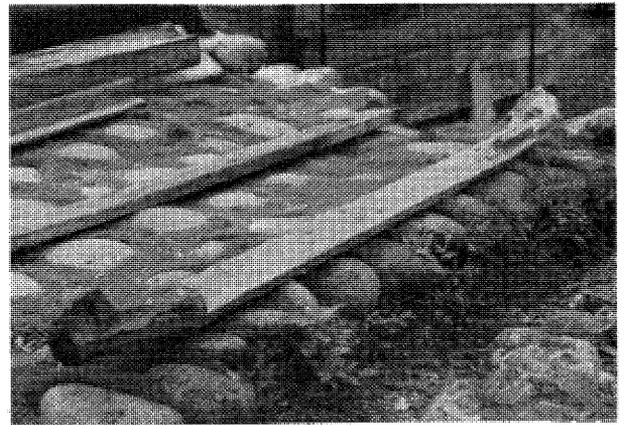


Fig. 9 柱

Tab. 4 建築用生産工具

名 称	切 断	加 工	接 合	彫 刻	整 地	
1. wasay	●	●	●	—	—	斧(刃は柄と平行)。
2. ipiparepareng	●	●	●	—	—	小型の wasay。
3. zaig	●	●	●	—	—	斧(刃に柄を納める)。新しい形式。
4. kawaz	—	●	—	—	—	板材の表面を平坦にする工具。突き鉋。
5. paet	—	—	●	—	—	丸のみ。木柱の穴を開ける。
6. ehema	—	—	—	●	—	小型の kawaz。平行紋 tagtagran 用。
7. ipibatok	—	—	—	●	—	のみ。波形紋 volavolaw 用。
8. kakali	—	—	—	—	●	掘棒。敷地の掘削用。
9. pisakwan	—	—	—	—	●	土の運搬用具。anongo の木の根元で作る。

2. 工法

特徴のある施工方法を以下に示す。

製材

伐採は wasay による。伐採後、同じく wasay で直ちに部材に加工する。寸法は人体尺度により計測し、直線を出すには、携えて来た紐を張って wasay で印を付ける。一本の木から、柱は1本、板は1~3枚作り出す。

木材の加工が終わると、そのまま村に持ち帰る。柱の運搬は、一端に紐を結び付け、急峻な山道をそりのように滑らせて行く。そのため、柱の地中に埋め込む部分は、紐を結びやすいように加工しておく。

木材は全て建主の敷地 sako に保存する。板は前庭 aorod に乾燥棚 ipanopit (4本の細い掘立柱で板を固定したもの)の形式で保管する。柱は、庭の一部 pananazaban に立てかけておく。

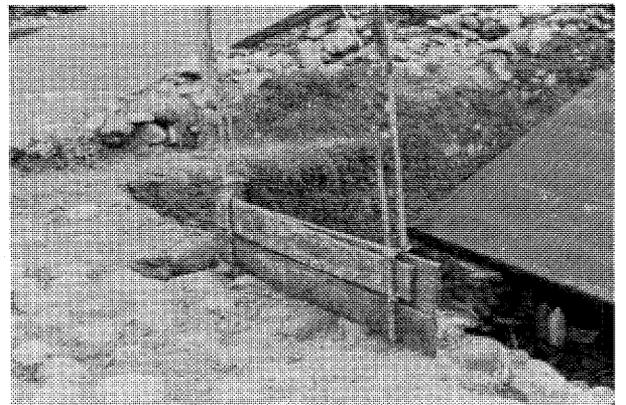


Fig. 10 ipanopit

だば接合方法

まず、だば yoray の位置を決める為に、板を合わせて相互に斧等で印を付ける。その位置に丸のみ paet で穴を穿つ。板の隙間を無くす為に、片方の板の接触面に赤土 vorilaw を塗り付け、少し小さい yoray を差し込んで板を合わせてみる。赤土が付いた部分を更に斧で削り取る。これを何度か繰り返す、隙間が無くなったところで固定用の yoray を差し込み、強く打ち込んで仕上げる。但し、このように赤土を用いず、目視による場合もある。

IV. 建築儀礼

建築儀礼は、いわば所有の手続きである。即ち、労力に対する報酬の機会であり、また社会や超自然界に対して新たな建設を認知させる行為でもある。

ヤミ族の儀礼の中心をなすのは落成礼 mivazay である。mivazay には上記の要素が全て含まれている。しかし、生産過程中には、要所に超自然界への祈念を主体とした小規模な儀礼が見られる。

ヤミ族は、以下のような方法で超自然界との交流を図る。儀礼はこれらの要素を含んで構成されることになる。

1. 祈りの言葉 toyotoyonen

言上げすることで至福を祈念する行為。様々な霊的存在に対して語りかける。特殊な語彙が使われるが、表現

は簡潔で、内容は直接的である。

2. 共食 mivevesan

粟・肉を食べる前に必ず行う。食物の一部を僅かに手に取り、祖霊 anito に対する祈りの言葉 toyotoyonen と共にそれを投げ出し、anito に与える。

3. 奉納

血の奉納 raralaen・イモや肉の奉納 manaod など、いくつかの形式がある。通常奉納時に祈りの言葉 toyotoyonen を伴う。

(*)以下で用いられるヤミ族の月名と現行暦はおおよそ以下のように対応する。

pipilapila	……………6月頃	kapitowan	……………12月頃
piyavean	……………7月頃	kaowan	……………1月頃
peakaw	……………8月頃	kasyaman	……………2月頃
pazpotoen	……………9月頃	kapowan	……………3月頃
(pitanatana)		(paneneb)	
kaliman	……………10月頃	pikokaod	……………4月頃
kaneman	……………11月頃	papataw	……………5月頃

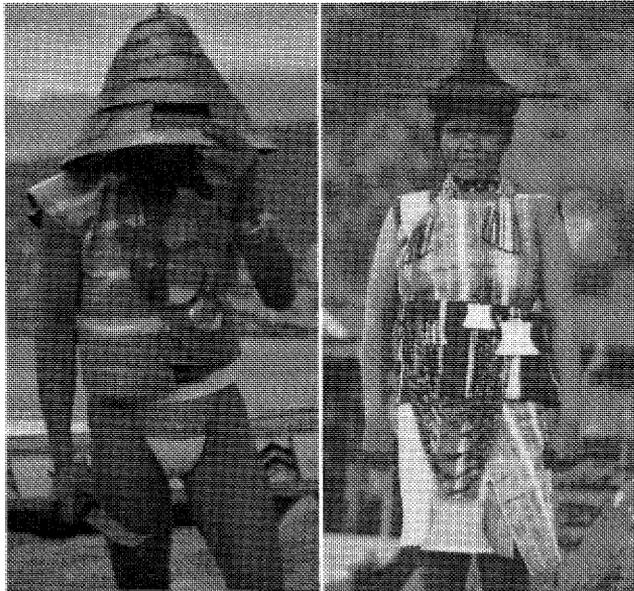


Fig. 11 儀礼用の正装

V. 生産過程

本梗概では、cinangbadan の生産過程 (Imorod 村) を示す(*)。落成礼関係の部分は、省略する。

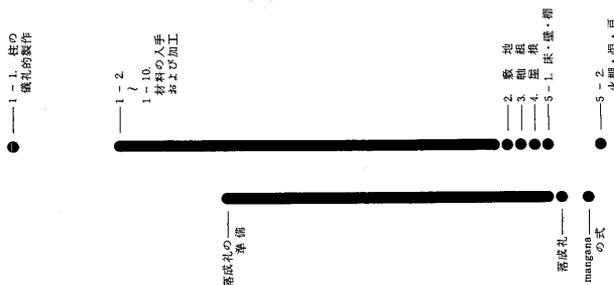


Fig. 12-1 建築生産過程の概要

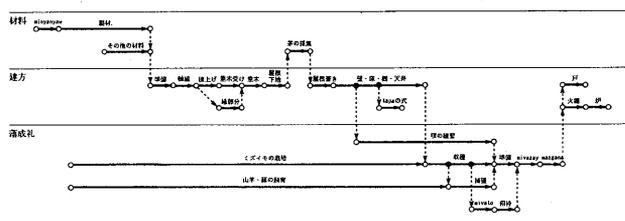


Fig. 12-2 工程図

1. 材料

● 1-1 柱の儀礼的製作 minyanyaw so ayi no vahay
○用材入手の作業に先立つ約1年前、piyaveanの月の吉日に、建主が一人で行う。

○長さ約1 dpa (1間)の柱を一本作製する。木の伐採前には、祈りの言葉 toyotoyonen を唱え、以後の作業が順調に行くように祈念される。伐採後、直ちに柱に加工して村に持ち帰り、pananzabanに置いておく。帰宅後の昼食時には豚の脂身 taroi で mivevesan をする。この柱は数年間雨ざらしとなるため実際には用いられず、建設終了後、manganaの式の後で焼却処分される。ただし、保存がよければ縁柱 ayi na do sesedepan として使われる。

● 1-2 通常の製材

○1-1の1年後から作業する。ただし kaneman・paneneb・pipilapilaの月は作業できない。建主および数名の手伝い sidongen により、数年を費す長期の作業になる。

○板 rasay・柱 ayi na の順に製作する。

● 1-3 腰壁 tangbad の製作

○piyavean・peakaw・kasyamanの月の吉日に行う。建主および多数の手伝い sidongen (20~40人) で作業する。

○以下の順序で進められる。

1. 準備：前の晩から、サツマイモを炊いておく。早朝、豚または山羊一匹を供犠する。のどを小刀で突き、そこから流れる血は容器に受ける。その後茅で表面を焼いてから、解体を行う。集まった人達は、細かく切った豚の耳を用いて mivevesan を行い、道中の安全を祖霊 anito に祈念する。

2. 伐採・加工・運搬：供犠した豚・山羊の生肉（豚は肝臓・肩や足の肉等、山羊は首や足の肉等）・粟・サツマイモ等を山へ持って行き、mivevesanの後それを食べる。太陽が中天に差し掛かる前には作業を終了し、村に持ち帰る。作業を早めるため、伐採や加工の一部は既に建主が行っている場合もある。

3. raralaenの式：tangbadを持って来ると、それを前庭 aorod に置く。建主夫婦が儀礼用の正装でその前に

腰を降ろし(右側に男, 左側に女がくる), tangbad に対して仕事があまくいくようにという祈念の言葉を夫婦で同時に唱えながら, 指に豚(または山羊)の血をつけ, それを tangbad になすりつける。

4. 分配および昼食: 手伝いに行った村人達は, 水浴後着物を取り替え, 再び建主の家に集まって来る。豚(または山羊)の肉を細かく分けて分配した後, サツマイモを盛り付けた数個のザル kazapaz を囲む。場所は建主の vahay や makarang の中であるが, 空間に余裕がない時は建主夫婦の兄弟姉妹の家等も使われる。全員が揃った頃, 煮て固められた血などを用いてまず建主夫婦が mivevesan を行い, 祖霊に対して作物の豊穰等を祈念する。続けて集まった人達が同様の mivevesan を行う。終了後サツマイモを肉や飛魚と共に食べる。

● 1-4 棟木 sapawan の製作

○ piyavean・peakaw・kasyaman の月の吉日に行く。建主および多数の手伝い sidongen (20~40人) で作業する。

○作業手順は tangbad と同様である。

● 1-5 親柱 tomok の製作

○小親柱 aliyalikey a tomok は, 他の柱と同様である。tomok を相続した場合や以前の家の古い tomok がある時には, それを使う。一方, 大親柱 rakorako a tomok の製作は, tangbad 同様の手続きが必要である。最後に製作される柱となり, kasyaman・pikokaod の月の吉日に, 建主および建主夫婦の kakteh を中心に十数名の手伝い sidongen で製作される。

○作業手順は tangbad と同様である。ただし, 九時頃には tomok を村に持って来て raralaen の式を行う。

● 1-6 木栓 yoray 用の木 pasek の採集

建方の1年前には伐採して乾燥させておく。建主が行う。

● 1-7 茅 vocid の栽培

○茅場の火入れは, pitanatana の月から kaliman の月の頃に建主が行う。次の kasyaman の月から pikokaod の月の間に, その年自分が取る茅の領域を定め, 目印に周辺の茅の上端を縛っておく。

○茅は, 集落共同体の所有する茅場 kavocidan で栽培される。その維持のために毎年茅場を焼かなくてはならない。そこで, その火入れ作業をした人が優先的にその年の茅を得るのである。その年に新築しない人も, 補修の為に必ず茅が必要となる。しかし, 量は少ないから, 火入れをした人の残りで充分間に合わせることができる。

この茅の採集作業は, 屋根葺きの日に行われる(→ 4-4)。

● 1-8 竹 kawalan の伐採

建方の年の pikokaod の月に伐採し, pipilapila の月に

枝を切り落として運んでくる。

● 1-9 オニガヤ sinasa の伐採

建方の年の pipilapila の月に伐採し, 乾燥しないように水辺に置いておく。

● 1-10 緊結材 vazit・wakay の採集

建方の年の pipilapila の月に行く。

2. 敷地

新たに敷地を作る場合は以下のようになる。

● 2-1 敷地 sako の掘削

○ piyavean の月の吉日に作業を始める。建主および建主夫婦の kakteh を中心にした手伝い sidongen で10日程作業する。豚または山羊を一匹提供して, 村中から多数の手伝いを受けると, 2日ほどで終了する。

○各自が掘棒と運搬用の pisakwan を持参して作業を行う。床面の段差はこの段階でつける。

● 2-2 排水口 rarahan o ranom の施工

作業日は何時でもよい。作業者は老人に限られる。近い親族のなかの老人が手伝うことになる。

3. 軸組

● 3-1 柱・梁の組み立て

○建主および十数名の手伝い sidongen で作業し, 5日ほどで終了する。豚や山羊を提供して更に多くの手伝いを集めることもある。

○掘棒で敷地に穴を掘り, そこに石を埋め込んで柱を立てる。柱が立つと, 上端に母屋桁 panyakdan をのせ緊結する。

● 3-2 棟上げ misogat so tomok no vahay

○ 3-1 の後, piyavean の月の吉日に行く。建主および建主夫婦の kakteh 等 4~6名程の手伝い sidongen が来て作業する。

○ vahay の架構の中心となる tomok・mipososok・sapawan を組み立てる。

1. 大親柱 rakorako a tomok を立てる。9時頃 (katesen no misibo) までに作業を終了しなくてはならない。立てる時, tomok に対して祈りの言葉を唱え, 至福を祈願する。

2. 小親柱 aliyalikey a tomok を立てる。この時には, 特別な祈りはない。

3. 梁 mipososok を取り付ける。tomok・panyakdan と緊結する。

4. 棟木 sapawan を取り付ける。kananarowan (tomok も含めて) と緊結する。

昼食には, 豚の脂身 taroi を用いて mivevesan を行い, tomok に対して豊穰や作業が順調に進むことを祈念する。

4. 屋根

- 4-1 垂木受け pasosowan の取り付け
3-2 の直後またはその翌日行う。作業者は3-2 または4-2 と同様。
- 4-2 垂木 pakaw の加工および取り付け
3-2 の翌日から行う。建主および建主夫婦の kakteh 等の手伝い sidongen で作業する。約20人工ほど要し、4~6日かかる。
- 4-3 屋根下地材 sinasa の取り付け
4-2 の終了後、建主が3日ほど費やして作業する。
- 4-4 屋根葺き miyatep

○ piyavean の月の吉日に、集落の人 kiliyan や集落外の建主夫婦の kakteh など合計50人ほどの手伝い sidongen で作業する。建設過程中、最も手伝いの集まる作業である。茅の収集は早朝に約1時間程かけて全員で行い、屋根葺きは9時頃から11時頃まで続く。

○作業は以下のような手順で行われる。

1. 準備：建主は、2・3日前から屋根葺きの日のための準備をする。サツマイモ・ビンロウ・薪を集め、粟をつく。屋根葺きの日、各自が朝食の後、建主のもとに集まる。豚または山羊を供犠して、mivevesan を行う。
2. 茅の採集：集める茅 vocid の総量が150束ぐらいになるように一人4束から5束を割り当てる。建主の確保している茅場 kavocidan に全員が行って採集する。道具は用いず、手で引き抜くだけである。不足の時は、それ以外の茅場からも採集する。余った茅は、壁や豚・山羊を焼くため等に用いる。
3. 屋根葺き：作業中に、豚（山羊）の生肉やサツマイモ・粟が出され、mivevesan の後それを食べる。
4. 昼食：屋根葺き作業が終了すると、正午頃に調理した肉やサツマイモが昼食として出され、mivevesan の後それを食べ、散会する。

5. 内外装

- 5-1 床・壁・棚の施工
○ 4-4 の作業終了後、午後から開始する。建主および僅かな手伝い sidongen で行う。
○ 作業は、柱の下部—tangbad や床桁 ransan、床板 tapi から始める。床板がある程度できると落成礼のための歌の練習が始まり、寝泊りもできるようになる。
- 5-2 火棚 pala の製作
○ mangana の式が済んだ翌日、村の年寄りを一人招いて行う。老人以外は作業出来ない。製作は午前中に終了する。
○ 前室 dosepanid と後室 dovahay にある炉の上の火棚を作る。老人は自宅での朝食の後に作業を開始する。終了後、昼食時に豚の脂身・20枚程の脂身 taroi・一ざる

(asa piyayo) の炊いたミズイモ等を贈与する。

- 5-3 炉 rarapoyan の製作
前室の炉は、火棚 pala を作った直後、後室の炉は回遊魚の漁期まで使わないので kasyaman の月の頃に作る。建主が作業をする。以後、vahay で調理がおこなわれるようになる。
- 5-4 戸 pangeneban (pazezevengan) の製作
mangana の式が済んだあと、建主が製作する。

〈研究組織〉

委員：

日本・建築学	乾 尚彦	北海道工業大学
	佐藤 浩司	東京大学
台湾・建築学	楊 逸詠	浩群建築師事務所
	林 希娟	逢甲大学
	陳 長庚	成功大学
	黃 俊銘	中正理工学院
	方 鏗雄	淡江大学
・民族学	劉 斌雄	中央研究院

作業員（委員以外）：

尤 文勝	方圓建築師事務所
洪 楚源	成功大学
林 國佐	〃
鄭 政利	〃
吳 景棠	〃
載 育澤	〃
黃 淳徳	〃
張 康一	〃